

第54回津市総合教育会議議事録

日時：令和5年11月22日（水）

午後1時開会

場所：津市教育委員会庁舎4階 教育委員会室

出席者

津市長

津市教育委員会

前葉泰幸

教育長 森 昌彦

委員 西口晶子

委員 富田昌平

委員 田村学

委員 山口友美

事務局 定刻になりましたので、前葉市長から第54回津市総合教育会議の開会の御挨拶をお願いいたします。

津市長 ただ今から、第54回津市総合教育会議を開催いたします。

事務局 ありがとうございます。それでは、本日の「1 協議・調整事項」であります「津市の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱（案）について」に入りたいと思います。まずは、事務局から御説明させていただきます。

教育事務調整担当参事（兼）教育事務所調整担当参事・教育総務課長 教育総務課長でございます。着座にて失礼いたします。

お手元にお配りさせていただきました資料1、A3版のものと、資料2、A4版のものがございます。こちらに基づきまして御説明をさせていただきます。

まず、はじめに、資料1を御覧ください。前回第53回の総合教育会議で事務局から夏に開催いたしました各団体との懇談会で頂いた意見等を踏まえまして、次期教育大綱の骨格案の、さらに案となるようなものをお示しさせていただきました。資料1で申しますと、一番左の列にございます、次期教育大綱策定の考え方、第53回総合教育会議資料のところでございます。資料1は全部で6ページに渡っておりますが、これからの公立幼稚園が果たすべき役割のほか、全部で5つのカテゴリーに一旦分けさせていただいて、①から⑩までの骨格案をお示したものでございます。こちらを叩き台にいただきまして、前回の総合教育会議で御協議いただいた内容を踏まえ、改めて教育大綱に記載する本文案といたしまして、まず津市の教育がめざす姿を整理いたしました。これが資料1の中央の列にございます部分であります。さらに、このめざす姿の実現に向けて取り組むべき施策を教育委員会事務局の各課、各担当で確認・検討いたしまして、各施策の内容を書き上げたものが取組内容、資料1の一番右の列にあたる部分でございます。まず、めざす姿を掲げまして、それに向けての取組を書くという流れで、事務局内で一旦考え方を整理いたしまして、その内容を実際の教育大綱のスタイルへ落とし込んだものが資料2でございます。

恐れ入りますが、資料2を御覧ください。1枚めくっていただきますと「はじめに」といたしまして、教育大綱とは何かということに加えまして、4段落目ちょうど真ん中くらいになるのですが、先程申し上げたような今回の新しい大綱の考え方を書かせていただきました。読ませていただきますと、『今回の教育大綱は、これまでの教育大綱の枠にとらわれることなく、津市の教育に今、何が大切なのかについて着目し、まず、これからの津市の教育が「めざす姿」を書きまし

た。「子どもたちが安心して過ごせる教育環境を整備していきたい」、「先生たちがやりがいをもって、笑顔で働ける学校にしていきたい」、「地域とともに皆で子どもたちを育ていく体制を進めていきたい」など、津市の教育がこうあってほしい姿を志高く掲げたうえで、その実現に向けて何をすべきかを「取組」として記載しています。「めざす姿」に一步でも近づけるよう一生懸命努力していくことを、この教育大綱に書き上げました。』とさせていただきます。

その上で、1ページ目からでございますが、まず、5つのカテゴリーごとにめざす姿があり、それに向けての取組を書いた構成となっております。取組の内容は、先程の資料1の取組内容を、もう少し簡潔にまとめたものでございます。なお、先程5つのカテゴリーと申しましたが、新しい大綱に載せる順番について、まずは、子どもたちのことということで、「1 子どもたち一人一人に応じた教育の推進」としまして、2つ目としまして、3ページでございますが、子どもたちにとってはハード、ソフトでいえばソフト面にあたるかと思うのですが、「2 教職員が元気で生き生きと笑顔で働くことができる学校づくり」といたしました。3つ目としまして、4ページですが、ハード面の話としまして、「3 子どもたちがより良い学校生活を送るための教育環境(施設等)の整備」といたしました。4つ目としまして、5ページでございますが、子どもたちの周りの環境のこととしまして、「4 学校・家庭・地域がつながり、子どもたちを育ていく体制づくり」とし、最後の5つ目、7ページでございますが、「5 これからの公立幼稚園が果たすべき役割」という順番でまとめさせていただきました。

なお、めざす姿の横に丸印で数字が振ってあるかと思うのですが、ちょっと紛らわしいのですが、資料1にあった通し番号①から⑯でございます。資料1と資料2で順番が変わってございますので、対比していただきやすいように、一旦番号を振らせていただいております。御了承ください。

以上で、事務局で考えました新大綱の案ということでまとめさせていただいたものでございます。説明は以上でございます。御協議の程よろしくお願い申し上げます。

市長 ではただ今から、この教育大綱の議論に入ります。これは私の判断ですが、取組内容を見ながらめざす姿を考えていくと、予定調和というか、言わば逆算というか、これがあるからこう書いておこうみたいな話になるといけないので、敢えてめざす姿をまず議論します。取組内容は見ないでやってみようという作戦ですね。めざす姿の案が今日出ましたから、この文案に対してもう少しこう書くべきだとか、こう直すべきだという議論をまずさせていただいて、ひょっとしたら今日1時間それだけで終わってしまうかもしれませんが、それでも構わないというつもりでいます。

その上で、そういうふうを書くのであれば、取組内容はどうかという、そうしないと、予定調和というか、財政上の制約、人の限界などというようなことで、取組内容からすると、めざす姿が非常に縮こまったというか、本来めざす姿ではない姿を書いてしまうと、志が深くないので、是非そういうような形で進めたいというふうに思います。

では、どちらでいきますかね。どちらが見やすいですか、皆さん。

資料2でいきましょう。では、まず第1章。「子どもたち一人一人に応じた教育」で、めざす姿が4つ書かれてありますので、これについて、お気づきのことを御発言願いたい。こういうふうになりますのでよろしくお願いします。

では、第1章からどうぞ。

こちらの質問から入りますが、子どもたちのことをずっと書いているのに、⑧のICTのところだけ、教職員がここで顔を出すのは、どうしてなのでしょう。4行目の最後のところ、少し違和感があるのですが、本局へ質問です。

学校教育・人権教育担当理事 すみません。めざす姿の⑧だと思いますが、またのところで、子どもたちも教職員も自分の力を最大限に引き出して取り組んでいますというところなのですが、子どもたち一人一人に応じた教育を、子どもたちが輝く教育をするためには、やはり教職員自身も自分の力を最大限に出して輝いている必要があるというふうなところで、子どもたちだけのことではなくて、お互いに高め合っていくということが非常に大事で、ここは子どもたちだけではなくて、先生も自分の力を最大限に引き出しているというところが、そこから良い授業が作り出されて、それで子どもたちが一人一人に応じた教育がなされていくというところから、教職員もここには付け加えさせていただきました。

津市長 ありがとうございます。この書き方の、いわゆる姿勢の話なのですが、ここは子どもたち一人一人に応じた教育がこのように推進されているということを書いているわけで、それはこういう状態をめざしますというのに、教職員が自分の力を最大限に引き出して取り組んでいますということになると、それはいきなり違和感があります。教職員の話は第2章で書けばいいし、もしそういうことを行うために教職員も頑張っていますというのが、取組で書かれるのは構わないのですが、いきなり教職員が頑張っていますと書くと興奮めしてしまいます。

こういうような意見をどんどん出してください。どうぞ西口委員。

西口委員 まず第1章の題が、「子どもたち一人一人に応じた教育の推進」というのが気になって、前からよく使われ過ぎているので、「子どもたち一人一人が

主人公となる教育の推進」として、それを最初に持っていくというのはどうだろうという案を考えてみました。

めざす姿の一つ目は、いろんなどころで出てきた意見の中で、子どもたちの意見を聞いたり、受け止めたり、子どもたちが子どもたち目線で考えるということが出てきたので、いわゆる資料1で言うと、⑥のこの最初の部分を少し使って、子どもたちが進んで、自分たちの意見を出すようなそんな場が保障されて、意見を自由に言うように取り組んでいますというようなことを一番にしたらどうなんだろうということを一度考えてみました。

津市長 こういうふうにどんどん意見が出てきますので、「それはこういう事情があるのです」など、言うことがあれば事務局から発言してください。そうでなければスポンジのようにしっかり吸収していただいて…。

よろしいですか。他いかがですか。では田村委員。

田村委員 ちょっと西口委員と同じような感覚なのですが、「子どもたち一人一人に応じた教育の推進」というような大きな項目を掲げると、私としてはこのめざす姿の2ページの上のほうにあるICTに関連した表現に、少し違和感を覚えたのです。大事なことなので、どこかに当然盛り込まなければいけません、ここも一番のタイトルが変われば、これがすんなり行くような…。ですから、どうしたらいいというわけではないのですが、そんな気がします。

津市長 他にいかがですか。富田委員。

富田委員 ここだけではなくて、全体に関わることなのかもしれませんが、めざす姿というところの主語が何になっているのか、よく分からないところがあって。第1章で言うと、めざす姿というのは津市の学校はこんな場所ですということをめざしていますというような描かれ方なのですが、この第1章は、他の4章と比べると、子どもというところが中心にあるような、そういう中身になっていると思います。なので、「子どもたちは、こういうふうになっていきます」など、子どもたちがめざす姿、こんな子どもたちになるように津市の教育はめざしていますというように書いた方が良いのかなという感じはします。

例えば、「子どもたちは自ら進んで身近な様々なことに興味関心を持って、それについて好奇心を旺盛に探究していきます」というふうな感じで、幾つかこの津市の教育を通して実現していくような子どもたちの姿というものがあつたほうが良いのかなと思います。それに対して、そういう姿を実現させていくためには、津市の学校ではどのような経験を教職員中心に構成していったら、どのように関わ

っていけばいいのかというのが、取組の書きぶりになっていくといいのかなと思います。

津市長 なるほど。子どもがそういうことをやっている状態、そういう場所である学校、みたいに……。

富田委員 はい、そうですね。

津市長 今、「津市の学校では……」ということで書くのですが、結局「子どもたちが」という主語なわけで、どういうふうに行けばもう少しスマートな感じになるか、ですよ。

「子どもたちは津市の学校でこうしています」と書けばいいのか。「津市の学校では……」と書くからあれなのかな。どうなのですかね。「津市の学校では」は当たり前か……。

富田委員 「津市の学校では」のところは取組の際に書くべきであって、他とのバランスを取るのが難しいところですが。第1章は「子どもたちは」というのが主語になって、第2章は「教職員は」というのが主語になって、というふうになるのかなと思います。そうなってくると、章の構成もそこが主語になってきますから、構成の考え方が非常に大きな見直しになってしまいますが、現状ではどの姿について書いているのかよく分からない状況です。

津市長 そういう構成について、教育長どうですか。

教育長 まず、「何々していきます」という書き方ではなくて、最終は令和9年度ですが、この4年間の中で最終的に「子どもたちはこのようになっています」「このような姿で過ごしています」みたいに、その時の子どもたちの姿をそのまま書く。つまり、こんなふうにしていきたいという書きぶりではなくて、その子どもたちの姿をここに書くというのを大前提として書きました。

主語については、まだ精査しなければいけないと思います。ただ、第1章は子どもたち、第2章は教職員なのですが、ここにも書いてありますが、「教職員が笑顔で働くことができる学校づくり」は当然、やはり子どもたちもそうなのだろうということでいくと、その辺りを少し一回整理させてみて、うまく主語がそれぞれにきちんと分かりやすくなるよう、もう一回考えてみたいと思います。

津市長 「はじめに」のところ、先程、事務局が紹介した4段落目ですが、ここは「子どもたちが」、「先生たちが」、「皆が」というふうに割り切れているのですが、本文にいくと割り切れていない感じがするのです。

教育長 1の2ページ目の最後のめざす姿、⑨のところも同じで、それも子どもたちにはなっていないのです。「インクルーシブ教育のもと、子どもたちはこんな姿です」という書きぶりではないのです。

津市長 「子どもたちが、障がいの有無に関わらず安心して学んでいて、インクルーシブのもとで、皆が個性や能力を発揮しています」のような感じになるのでしょうか。それをめざすためには、私たちがそういう環境を作りますみたいなことなのでしょうね。あるいはそういうことを啓発していきますというような感じなのでしょうか。

富田委員 めざす姿という時に、やはり未来の姿を想像するような気がするのですが、今の教育長の話だと、現在の津市の学校現場の中での子どもたちの姿というふうな感じになってしまって、ですから未来の、例えば子どもたちが学校教育を終えた18歳ぐらいの時に、どういう姿であってほしいか、みたいなそういう書きぶりではない感じですよ。

教育長 違います。この大綱の中で今、ずっと進んでいった中での最終年は令和9年度ですが、そこに至るまでの姿として、「子どもたちはこういう姿になっています」というのが描く姿です。もっと先というのはそうなのですが、まずは令和6年から令和9年度です。

ずっと先というのは、当然頭の中にあります、ここに描く姿は、そうではない。ずっと先ではない。例えば10年先、20年先、子どもたちがどのような力をつけるかという時は、当然そのことを描きますが、ここで書くのは、この何年間の取組の中で、最終、子どもたちはこんな姿になっていますということです。

御意見があったら頂きたいです。

富田委員 やはり、「津市の学校では」とすると、子どもたちの姿も学校現場の中にとどまっているような印象があるので、子どもたちが学校の外に出た時に充分に力が発揮できるような姿を想定していくには、あまり津市の学校では、という書きぶりはしないほうがいいのかという感じはしますね。

津市長 こういう姿を実現するために津市の学校はこうしていますなど、こういうことをやります、みたいな。

では、どうぞ山口委員。

山口委員 もう少しシンプルに分かりやすく書いたほうが、いろいろな市民の方も分かっていただけだと思うのです。主体的な自己を発揮し、達成感を得たり、多様な人々と協働し、自分の可能性を伸ばしたりという体験ができる。そういうふうにして、主体性のある教育に行かれようとしているのだと思うのですが、先程、富田委員が言われたように、生き生きと自分の意見が言えるようにということを中心としたことを主体的であると捉えるのであれば、つまり「主体的な自己を発揮し」ということであれば、そこでいいと思うのです。シンプルにしないと、あれもこれも入れておくと、取組もまたあれもこれもとなって、何をするのかということにもなりかねないので、もう少し項目ごとに行う姿を見直したほうがいいのかと思います。

津市長 生き生きと自分の意見を進んで言っていて、そしてものすごくにぎやかなとか活発なクラスの中で、伸び伸びと発言しているという姿があって、それが結果、自分の可能性を伸ばされているのですよね。そういうことですね。

山口委員 相手の意見も受け入れないといけないし、自分も意見を言う。相手の意見も受け入れるという教室運営をしていくためには、相当な努力も必要で、そのためにどうするかということ、先生方につなげていかないと…。

津市長 そうなのです。ですから、「自分の可能性を伸ばしたりすることができる体験や経験」と書くと、これは結局、教育者の目線ですよ。『そういう経験をさせましょう』というような教育者の目線なのです。子どもたち目線ではないと思います。ですから、「子どもがこんな感じで、今、学校生活を送っています」というような書き方になれば良いのと思います。もっとシンプルにして。

はい、では田村委員。

田村委員 今、伺っていて、自分も頭の整理をしまして、富田委員が言われたことは、やはりこの第1章の項目に掲げたことからすると、当然の御意見かなと思います。大変な書き直しになりそうな気がしますが、まずは、どういうふうな子どもたちの姿をめざすかという、その子どもたちの姿を表現していくような考え方なのかなと思って聴いていました。今、書いてあるのは、そういう子どもを育



むステージとしての学校が主役のような書き方になっているので、逆転させるという発想だったというふうに思います。

こんな子どもたちがいるようにしたいよね、こんな子どもたちばかりにしたいよね、というふうなことが出てくると、その述語の在り方も変わってきますよね。これはやはり、市長が言われるように、学校が主語なので、こういう指導をしますなどのようになっています。

津市長 やはり「めざす姿」というこのカテゴリーが悪いのですかね。誰がめざしているのかという、子どもたち自身がめざしているのかではなくて、津市がめざしているのか、教育委員会がめざしているのかですよね。もっとニュートラルにシンプルに未来の姿など、めざすというよりもこんな姿を描くなど、そういう姿みたいな感じでいいのかなと。

田村委員 この資料を頂いた時に、真っ先に思い出したのが、懇談会などの場で、市長がおっしゃってみえた、こうだったらいいよねというのを大綱にどうやって落とし込むかというのがありましたが、大胆に表現の仕方などを変えていただくので、すごくそれに近づいているなという印象を私は受けたのです。

前書きを読まないで、こんなだったらいいよねというのが、このめざす姿に描いていただいたので、今こんな状態なのだというふうには誤解されないように、その工夫もあると思います。

津市長 よく未来ビジョンなどの計画もので、2030年にはこうなっていますよ、その方向に向けて頑張りますというようなものが……。

田村委員 めざす姿など未来がこうあってほしいということを、ここに書いていますよということ、しっかりと印象をつけておかないと、何か誤解を招くようなところは少し心配しています。

山口委員 皆さんが本当に子どもたちにどうなってほしいのかということが、もう少し見えるというか、ビジョンにするとまとまっていくと思うのです。本当にどうなっている姿が希望なのかということだと思うのです。これが多分、頭の中にそれぞれたくさんあって、なんとかしようとするからこうなるのです。

本当のところは、津市の子どもたちにどうなってほしいのかです。今、子どもたちもどんどん減っている中で、ICTなど質の高い色々な関わりの中で、少し先を見るというのを、本当に一人一人に語っていただくと見えてくるのではないかなと思います。

津市長 シンプルに言えば、学校が、楽しい場所、行きたい場所であって、そこへ行って、インクルーシングも含めて友達関係がとても良く、お互いを尊重し、思いやりを育みながら、人間的に成長していける場所であって、そして学力が身について、ICTも含めてね、そんな場所になるといいですね。

山口委員 それだけのことなのです。なかなか本当に難しいですね。

西口委員 全部今、津市の学校からスタートしているということで、私、その大綱をずっと読んでいて、一番引っかけたのが、どこまでの子どもたちをイメージしたら良いのだろうということです。津市の学校ですから、学校の中のイメージになってしまっているのですね。それはそれでいいのですが、やはり、子どもたちが主語になったらどうなるのかということのを少し考えてみたい。

もう1つは、このめざす姿のところが、とても一文が長いので、もう少し一文をせめて2行ぐらいまでにしていただいて、シンプルに挙げてほしいなと思います。

津市長 事務局泣かせの意見がずっと出ております。

富田委員 よろしいですか。ごめんなさい。事務局泣かせの話で申し訳ありませんが、子どもたちの中に育みたい資質・能力というところを考えて、そこで整理していくとやはり分かりやすいのかなと。それは教職員のほうも同じで、教職員の中に育みたい資質・能力とは何かということを考えて時に、例えば子どもの場合だったら、非認知能力の中で誠実さや粘り強さなど、色々あるわけですよね。思いやりなどもそうです。そういったことに従って、子どもたちは命を大切に、他者を思いやることができます、あるいは子どもたちは何事にも積極的に自らの可能性を出してチャレンジします、あるいは何事にも粘り強く取り組みますなど、そういうシンプルに、子どもたちはこれこれしますみたいなもの。あるいは教職員はこれこれしますというふうなものがあって、ではそのためには一人一人のニーズに応じた学習というのが大事だよ、個別最適な学びも大事だし、協働的な学びも大事であって、ICTを活用したというのも大事だったなど、そういう具体的な現場での取組というのが、めざす姿には入れずに後から付くのかなとは思いますが。

津市長 富田委員の話からいくと、こういうのがあって、そのためにはこういうものが必要なんで、だからこうしますみたいな、ひょっとしたら三段書きなのか

もしれないですね。二段、三段をまとめて取組をして書けばいいのかもしれないね。

よく現場を御存知の西口委員、どうすればいいでしょう。

西口委員 いや、どうすればいいんだろう。

この中にしても子どもたちにこうなってほしいという姿が出ているので、例えば「夢や希望を持って安心して学べる」というような、そういう文言を大事にしてもらいながら、せっかくここまで落としていただいたので、一回それを少し子どもたちの視点で整理したらどうなるのかというのが見てみたいです。

津市長 子どもたちは夢や希望を持って安心して学んでいますということなので、そして、それを実現するためにはどういうふうに学校づくりや教育を展開しますかということですね。

どうですか。ここまでで教育長、あるいは教育委員会、何かありますか。

教育次長 すみません。今、第1章のところで主語の話なのですが、第2章は教員が主語なのですが、例えば、第3章は学校や放課後児童クラブというのが主語にあたるのかと思います。この第4章のところは、どういう主語になってくるのでしょうか。

津市長 それは、先程言ったように、「はじめに」で書いたところによれば、「地域とともに皆が」です。これは「学校・家庭・地域の皆が」という主語なので、多分。公立幼稚園も「公立幼稚園の子どもたちは」になっています。

次へいきますか。早く先に行ってほしいなので。

教育次長 すみません。

津市長 では第2章ですね。教職員のところですね。どうぞ。

③④などは、もっとダイレクトに、「津市の教職員はこのウェルビーイングの向上が実現している状態をめざします」とか。「環境が整っています」というよりも、「教職員がやりがいをもって働いています」みたいな感じなのでしょう。

どうぞ。山口委員。

山口委員 大体そうなのですが、子どもたちにこういうふうになってもらいたいという姿があって、それを達成するために子どもたちはこういうことを学んでいく。教職員はそのためにこういうことをする。地域はそのためにこういうことを

する。設備はそのために、子どもたちがこういう姿になるために設備を行うということで、そもそも子どもたちにこうなってもらいたいからというのがあって、それぞれやることが見える気がします。これを見ていると、教職員もウェルビーイングがちゃんと整っていなければ、子どもたちはそういった姿にはならないので、それぞれの役割みたいなものがあるような気がします。

津市長 ですから、第1章の子どもたちはの主語と、第2章からの主語は、意味合いがやや異なるのではないかとということですよ。全て子どもたちのところへ戻っていかないといけない。

一方で、教員自体が、ブラックだの何だのというような状態から早く脱して、本当に学校現場で生き生きと働けるような、そういうことをしなければいけないわけで、その教職に携わる方々のあるべき姿を、「子どもたちにこうするために教員はこうしましょう」ではない世界を書きたいという気持ちもある。教員はやはり教育資源なので、それを大事にしていきたいという気持ちもある。子どもたちのしもべではないということです。

山口委員 休憩時間の職員室には絶対入らないと決められていたり、休憩時間はきちんと対応する方が別にいて、この方が全部対応したりなど、徹底的に守られているところがあります。

津市長 どこのお話ですか。

山口委員 オランダです。教職員の方を守る取組です。

津市長 休憩時間が必要ですからね。これはどうですか。

西口委員 最初の「教職員が元気で生き生きと笑顔で働くことができる学校づくり」の元気というのと笑顔というのが、すごく気になって、最初に書いてあったように、教職員はやりがいを持って笑顔で働ける学校にしていきたいという意味ですから、「教職員がやりがいを持って笑顔で働くことができる学校づくり」にしたほうが良いのではないかと。元気ってどんなのですかね、笑顔でいつもいないといけないなどと言われてきたので、そう思いました。

津市長 やりがいだけで教員になってくれない時代。職場としてやはり楽しい職場、笑顔で溢れる職場でないといけないということを、最近私はすごく感じます。

田村委員 不適切な表現かもしれませんが、顧客満足度を上げるために、まず従業員満足度を上げようという企業の取組、これ、子どもたちに良い教育などを提供していくためにまず、教員の働きがいというのがなければ、良いサービス提供ができるはずがないというのは、これ共通して言えることなのかなと思います。

ここはそういうことが一部書いてくれてあるのですが、市長は少し教員のための、教員のそういう対応と言われましたが、結局それは、子どもたちのためなのだということが、少し書いていただいて、触れてはいただいています、もう少しストレートに、それが子どもたちにとってつながっていくのだということも言ってもいいのかなという気はします。

津市長 今回の世の中での「こどもまんなか社会」と言われていることというのは、子どもが全ての上位に立つという意味ではなくて、子ども目線の子どもの育みたい、あるいは子どもがこうあればいいなと思うような事柄を、皆がそういう観点で、色々な政策を推進していきましょうねというのが「こどもまんなか社会」ということなので、今回の教育大綱も子どもを中心に書いたとして、やはり並列ではないのかもしれないですね。そのために、そういうことをめざす教職員はこうであって、あるいは整えるべき教育環境はこうであってという、そういうふうなものかもしれません。家庭はともかく地域もそうですよね。子どものためにどういうふうに自分たちは役割を果たすかみたいな話なのですよ。

富田委員 先程、西口委員が言われたように、やはりこの元気、笑顔というのが気になって。元気には空元気というのがありますし、笑顔は作り笑顔というのがあるように、割と外見的に操作できる対象のような感じとしてあります。ですから、そうではなくて、内面的なものを求めていくというような書きぶりになると、例えば、「教職員が自らの仕事に喜びや楽しさ、生きがいを感じるができる学校づくり」というような、そんな感じだと、それは内面的な豊かさを求めている、外見的に何だろうと、「空元気で作り笑顔でいなさいよ」というふうにはならないと思います。

津市長 ごもつとも。

田村委員 それをカタカナで言うとウェルビーイングみたいな感じでもあるのですかね。

津市長 ウェルビーイングが独り歩きするのも何かと思います。

田村委員 私が敢えて言わせていただいたのは、こういうふうに片仮名が出てくるのが個人的にはすごい抵抗があるので、先程戻ってしまったインクルーシブ教育とかが難しいので、もう少し平仮名で言えないのかなというのは常に思っています。すみません、話を逸らせてしまいました。

津市長 インクルーシブはもう完全に染みてきているという感じですか。ウェルビーイングはトレンドなのですか。載せたい気持ちもあれば、独り歩きさせたくない気持ちもありますし、なので説明がいるのでしょうか。

教育長 ウェルビーイングは思ったより色々なところで発信をしているので、学校の中では結構……でも勝手な思い込みかも分からない。ただ結構色々なところでこれがキーワードになっています。

津市長 感覚的には合うのですよね。

教育長 いろいろなことを説明しやすい。子ども、教職員、地域、全て。何か一方では成立しないので、根本は子どものウェルビーイングなのです。そのためにはという発想が一つあります。

それと理解いただいていると思うのですが、これら全て根本は全部子どもです。皆その発想で書いていて、そこに行き着く。ただ、第1章はダイレクトに子どもなのですが、あとは教職員もそうですし、環境もそうですし、地域、家庭もそうですし、幼稚園もそうなのです。幼稚園未就学を大事にすると言ったら、子どもたちの育ちが基盤だから、全部子どもたちの成長。そのためにめざす姿も御意見を聞いていると、もっとシンプルなほうが良いのかなと思いつつも、自分がこれを書いたのは、できるだけ具体的というか、こういうふうにしたつもりで、もっと別の言い方とすると、例えば、最初子どもたちのところに戻ると、どんな子どもたちかと言った時に、やはり一番変えたいのは授業なのです。一番肝心なのは授業なのです。そこはストレートに書くと、もっと具体的に言うと、先程元気にと委員さんおっしゃっていただいたのですが、先生が面白く分かりやすく話をして、子どもたちが「はいはい」と元気に手を挙げた授業、それは決して良い授業ではなく、そんな教室は求めています。どんな授業を求めているかというと、ここに書いてあるような子ども同士が、それぞれ自分の会話などの色々な話の中で、自分の意見を言い合ったり、それを先生がずっとそっとフォローしたり、そういう子ども同士の営みということが重視された授業が、今は当然求められています。なので、今言いました、いわゆる教員主導の授業というのは、我々がずっと行ってきた授業なのですが、そんな授業は、今は求められていませんし、

そんな授業をしていたら、先程言っていたような非認知能力的なことは達成できません。なので、自分たちはそういう目で、色々な学校の授業を見てきているのですが、教育活動の全てをどうしていくのかによって、子ども主体にということ、授業も一緒なのです。

先生がすごく上手に授業をしてますねとか、子どもはしっかり話を聞いてましたね、元気に手を挙げてましたね、それが昔の評価でしたが、今はそんな評価ではないのです。それを我々も分からなければいけないし、保護者も地域の方にも分かってもらわないと学校は変わらないと、私は思っているのです。もっと言うと、学校訪問に行くと、先生方は今も、先程言ったような授業をされている方がいっぱいいます。それがあたかも良い授業のように、おもしろおかしく話をして、子どもたちが元気に手を挙げています。でもその授業はだめですよと、私は皆に言っています。それも大事で、そんな授業も中には必要かも分かりませんが、そういう授業をしていたのでは、今求めている子どもたちの力につきません。ですから、そういったことも頭に置きながら、子どもの姿などを書いています。

その授業ってどんな授業なのか、学校で子ども主体の授業とはどんな授業なのか、子ども主体の教育活動ってどんなものなのかと言ったら、やはり自分も昔言われていた、こういう授業をしてきたので、でもそうではないということと、今つけていくべき力を、子どもたちに思考力・判断力・表現力など、協働的なことでやっていくとするならば、その授業ではないよということはどうやって発信していくか、それをどうやって創造していくかということなのです。令和9年度の終わりには、学校の授業が、教育活動がそのようにならないかな、少なくとも先生たちがそういう意識を持って授業をしてもらいたいなということ、今、学校訪問しながら理事と一緒に厳しいことをたくさん言っています。それが今の実態です。ですので、学校の授業像というのを、やはり根本からきちんと見直さないといけないと思っています。

津市長 先生がそういう授業をしていますというふうに書けばよいのでは。

教育長 本当にそうです。一番はそこだと。一番大事です。今までやってきた授業スタイルもそうですし、それを色々やっていくのも当然ですが、端末も有効に使えばいいと思うのです。有効に使いながらということになりますが、そういう授業をどうやって創造していくかというのを、先生ばかりが求めるようになって、教育委員会として、それをどうやってサポートできるか、もっと言ったら、子どもたちや親御さんたちも、それが当たり前の授業だというふうに、どうやって分かってもらえるかというのが一つです。そうでないと、普通に見たら元気に「はいはいはい」と言っている授業が、良い授業に見えます。ああ、良いな、元気に

やっているなど分かるから。でも、それだけではダメですよということを、どうやって、発信していけるか。ごめんなさい。喋りすぎました。

学校教育・人権教育担当理事 すみません。少し戻りますが、先程の教育長がおっしゃっていただいたところで、例えば、めざす姿の⑥、最初の「1 子どもたち一人一人に応じた教育の推進」のところ、委員の皆様が言っていたとおりで、自分たちも結構説明していて、取組が書かれているところもあるよなと思いつつ、最初は生き生きと輝く子どもたちがいますなど、そんなシンプルなことも考えたのですが、生き生きとのイメージが読んでもらった方が、「はいはい」と手を挙げて、元気な子どもたちが学んでいる姿をイメージされないかなと。ですが今、私たちが主体的な子どもたちの教育というのは、授業ごとに達成感を感じたりなど、お互いに協働する学びであったりなど、そういう体験学習の中で、学びに向かっていく、そういう生き生きした姿を分かって欲しいもので、こういう解説みたいな、少しくどいというか、説明交じりの形になったかなというのを、今、少し聞かせていただいていたのです。

そこを今、市長がおっしゃっていただいた、三段階のように、こんな姿ですというのがどんな姿というのを、私たちはここに書いてしまったのかなと思いました。すみません。

津市長 どうですか。そこまで話が進んできました。

田村委員 今の教育長の話聞いて戻ってしまうのですが、最初のところの、私が最初に言ったこのICTのところ違和感がある、段々自分で見えてきた状況で子どもたちの姿、ここだけ見えにくかった。でも見えているような気がしていた私の「子どもたちの姿」というのは、実は理想じゃないんだというのが、今、分かりました。元気で生き生きと、「はいはいはい」を想像して、そういう子どもたちが、この1番目と2番目と4番目に見えたのですね。でもそうじゃない。

教育長 それだけではない。

田村委員 3番目は、タブレットだけがもっていけるような、そんな雰囲気があったので、すみません。話戻してしまいましたが、そうなることややはり表現が難しいかも分かりませんが、なおのことそれが伝わるようにしないとイケません。

津市長 楽しいか笑顔でいられるかなど、そういう問題も、もっと突き詰めて言えば、要するに学校に行くことが心地良いかどうかということであり、心地良く



ないから不登校になるわけで、子どもにとっては、心地良い気持ちで行ける学校ということなのです。

山口委員 やはり、認めてもらうということがよほど大事で、一人一人に寄り添ってというのは、一人一人を認めることなので、この余裕が先生方にあるのか、一人一人がそれぞれ違うと思うのですが、一人一人がきちんと受け入れていられるのかというところが…。

津市長 ですから、子どもが主人公という話があるけど、この主人公ですが、それがどういうことなのかということで、子どもが主人公ですよというのはやはり、教育委員会側の目線なので、主人公である子どもはどのような状態、どのような気持ちなのか、どのような行動をしている子どもたちなのか。

山口委員 すみません。一つ、家庭教育というのは、これは関係ないというか、家庭教育というか、保護者など。

津市長 5ページというか、これつながりですから、家庭教育を書くかどうか。

山口委員 そう、保護者がとか、親がとか、家庭ではとか。やはり取り込めない。

津市長 それ、いつも問題になるところで、書いても良いのではないですか。文章で家庭はよく言われますよね。

山口委員 会話をするとか、そういったことを促していった方が…。

津市長 それ書きましようかね。教育長。

教育長 家庭教育ですかね。今言われたのは。そういう意味ではない。

山口委員 家庭教育ではないです。保護者です。子どもたちを取り巻くのは先生方と保護者と地域の方たちがいるということなので、保護者の役目、関わりみたいな。先生はこうする。地域の方たちがつながっていく、連携していく。という保護者の方が不在だといけないのかなと思って、仲間なので。

津市長 多分、当然の前提になっているのですかね。

教育長 多分これ家庭は保護者というのか。どうなのか。

山口委員 そうなのですよ。保護者。

事務局 保護者です。

津市長 大分時間が迫ってまいりました。ちょっと幼稚園。やはりこれも私が思うのは、立場上ずっと市長と教育委員会の間で、いつもその議論になっているのですが、どうして「特別な教育支援を必要とする子どもたち、外国につながる子どもたちへの配慮と丁寧な支援を心がけるとともに」で、「ともに」の前がメインですよ。子どもたち一人一人丁寧に育まれているのがメインであって、それとともに特別な教育支援を必要とする子どもや外国の子どもたちへの配慮や丁寧な支援も行われているのではないかな、というふうにいつも思うのです。どうしてここばかり強調するのか。子どもたちを丁寧に育むというのは何か枕詞みたいに書いてあるけど、もっとここをメインに書かないと。

結果として、小規模で目も行き届くので、同時に特別な教育支援を必要とする子どもや外国につながる子どもたちへの配慮も丁寧に行うことができる。全ての子どもを一人一人丁寧に育てているのが津市の公立幼稚園ではないですか、あるいは保護者の思いをしっかり受け止めてやっているのではないですか、といつも思うのです。私は何か意識がいつまで経ってもここをこだわるのはなぜかなと思っているのです。

それから最後の保育ニーズ。やはりここは幼児教育と書いてほしいですね。保育ではないですよ、幼稚園は。保育もするのですが、やはり幼児教育をやってほしいと思いますよね。富田委員。

富田委員 この第5章の公立幼稚園というところを独立させる必要があるのかどうか。

津市長 あるのかどうか。

富田委員 少し思うところで、1つ目に子どもが主語で、2つ目に教職員が主語で、3つ目に学校施設が主語で、4つ目に家庭や地域との関わりを主語というふうに仮に考えたら、それぞれのところへ公立幼稚園というのは収まるといえば収まるので、独立させる必要がないかなというふうな気はするのです。

津市長 あるいは逆に、未就学児のこと、今、幼児教育ですよね。そのことを書いて、もちろん私立の幼稚園、こども園もこういうふうになっておられて、それへの支援をもちろん行政としてはしていくのですが、公立幼稚園はこうしますというのは取組で出てくるのです。ダイレクトに未就学児。

富田委員 子どもたち全体の中で、公立幼稚園の子どもたちだけを取り出してというのは、今から特別支援教育の子どもたちなど、特別な子どもたちの独立した項目になりうるのではないかと。そういう対象もあるし、種別で分けていくのであれば、公立幼稚園という施設環境があるから独立させているのですが、全体の整理整頓と考えた時には、ここはやはり抜き出ているかなと思います。

田村委員 市長が定める大綱ですが、公立幼稚園の設置者としていわゆる一つの経営者としての支援というのが、先に出てくることに私も違和感を持っています。やはりもっと大事にすべきは地域全体の幼児教育であって、2番目の例えば、架け橋の取組など、それがどういう形になるのか、こうなっていくようにしていくというのが、やはり地域全体のことが先で、そうするためにこれからの公立幼稚園というのがあってもいいかなと思うのです。先にバンッと出てくることに、私も少し違和感を覚えました。

津市長 どうぞ。

山口委員 このめざす姿の②のこの最後の公立、私立幼稚園、公私立保育所、認定こども園のというのは、この前の地域連携のところにも入っても良いですよ。地域の中でつながっていくという。

津市長 就学前教育、保育をやっているところとの連携なのですね、これは。

西口委員 私は、幼稚園や保育園で独立してできることは公立幼稚園を中心にした未就学児への対応をここで明記しているのではないかということとして捉えてきたのです。どうしてもこのそれぞれの4つの中に入れてしまうと幼稚園はどこかというふうになり、薄まっていくような気がして、なのでこうあった方が良いのではないかなというのが私の考えです。

特に今、津市は架け橋が始まって、徐々に外に出てきていますし、姿も見えてきたし、ああ良くなって、ただ、市長が最初に言われたように、最初の書きぶりは、やはり子どもたち一人一人を丁寧に育みますと言い切るべきだと思います。

もう一つ言うと、しっかりという言葉が多いので、そういうのは少し適切とか丁寧とかにしていくと良いのではと思います。

津市長 もう一つ思い切ったことを言っておきますが、最初なので、もちろん公立幼稚園をどうしていくかというのは書かなければいけないと思うのですが、一方で幼稚園教諭は、もう半分くらいがこども園で勤務しつつあるわけじゃないですか。やはり、こども園が、津市立こども園が幼児教育をどういうふうにやっていくのかなど、それから私立さんのそれぞれ特色のある幼児教育、就学前保育を、元々教育を標榜しているこの津市で、特色ある形でやっていただくというのが、やはり我々としてはそこまで広げて、教育大綱ですから書いておいて、その中で公立幼稚園はこうしますみたいな書き方のほうが良いのではないかと思うのですよね。

教育長 めざすのはそこではないと、そこをしないと本当に意味がない。

津市長 いろいろと議論がございました。一部ちゃぶ台返しをお詫び申し上げます。かなり良いものができる予感がしてきましたので、次回を楽しみにして、今日はやはり予想したとおりめざす姿までとし、是非、事務局のほうで今日の意見を踏まえてお願いします。

事務局 総合会議であと2回御議論をいただきますので、よろしく申し上げます。ありがとうございました。

一同 (ありがとうございました。)